

最低生計費試算調査といっせい職場訪問 意義と目的を再確認し、さらに運動すすめる

茨城自治労連

私からは、この間茨城で取り組んだ最低生計費試算調査といっせい職場訪問について報告します。

まず、最低生計費試算調査ですが、茨城では春闘期に茨城労連主導のもと、加盟する産別組織が主体となって調査に取り組むとの提起がされました。私たち茨城自治労連も1月の中央委員会において、賃金の改善、最賃の引き上げにつながる国民春闘の大きな柱として取り組むことを決定しました。

アンケート調査については、茨城自治労連は他の産別組織の中でも比較的若い組合員が多いことから、20代～30代の独身で、一人暮らしの組合員を中心に積極的に調査協力してもらうことを心がけ、若年層のデータを茨城自治労連が大きく担うという目標を掲げて取り組みました。各単組での奮闘によってアンケートを無事回収することができ、産別組織としての役割を發揮し、調査に貢献することができました。

最終的な調査結果ですが、水戸市在住の25歳の青年労働者の最低生計費は、男性25万2987円、女性25万1124円で、月173.8時間の法定労働時間で時給換算すると、男性1,456円、女性1,445円となりました。また、ワークライフバランスに配慮した月150時間労働での時給換算は男性1,687円、女性1,674円となり、時給1,600円以上が必要という結

果になりました。

この結果はすでに調査済みの21都道府県と比較しても大差がなく、また、最賃が1013円で、2019年に調査を行った東京と比較しても遜色がありません。

今回、茨城における調査では、県内の茨城大学がアンケートの回答の分析などに関わったことが特徴で、全国では初めてのことでした。調査を行った茨城大学3年の男子学生は、「コロナ禍の下で求められているのは、雇用を守ることと賃金を上げることのどちらかではなく、双方だということ。(最賃の引き上げで)中小企業の経営が悪化するのであれば、政府が中小企業の負担軽減を重点政策として取り組むべきだ」と力説していました。また、同大学の女子学生は、「若い世代が未来に希望を持てるようにするには、現状の最賃では低すぎる、来年度の就職先の賃金が調査結果を下回っていて、社会に出るのが怖い」と話していました。

茨城の最賃は10月から2円引き上がり851円となりましたが、長時間働いても、普通に生活ができないことは明らかであり、全国一律1,500円以上の最低賃金引き上げに向け確信をもって運動を推進することが重要ということが改めて明らかになりました。

続いて、いっせい職場訪問と合わせて取り組んだ組織拡大についてです。

2020年10月27日

いっせい職場訪問については、茨城自治労連が毎年取り組んで、今年で4年目となりました。夏季闘争の予算人員闘争の一つとして、残業の増加や年休、代休の取得困難の原因を解消するための人員増を推進することを目標として、今年も取り組むことを決定していましたが、新型コロナウイルスの状況を考慮し、当初の5月実施の予定を変更して、6月16日を取り組みの基準日として実施しました。

コロナ禍の影響もあり、取り組んだ単組は少なくなりましたが、そのうちA市職においては、いっせい職場訪問の活動と同時に、新規採用職員への組合加入の声かけも行い、11名の加入に結び付きました。

A市職においても、新型コロナウイルスの影響により組合説明会中止を余儀なくされましたが、その逆境に柔軟に対応できたことにより、いっせい職場訪問の実施だけでなく、昨年の新採職員の加入を上回る組織拡大を達成することができ、他の単組を勇気づける画期的な活動となりました。

そのほか、B市職では保育所への訪問も行いました。訪問した会計年度任用職員の保育士からは、「退勤時間が早まったため園児の親に会うことができなくなり、情報交換がやりづらくなった」との意見もあり、会計年度任用職員制度がスタートしたことによる職場環境の変化は、このような仕事の部分にも大きな影響を与えていることが改めて分かりました。今後もいっせい職場訪問の活動の意義と目的を再度確認し、人員増はもちろんのこと、職場における切実な要求を丁寧に汲み取り、組合員が広く共有するための取り組みにしていく予定です。

最後になりますが、今年も全国で大きな災

害が発生しました。被害にあわれた皆様にはお見舞いを申し上げるとともに、現在も昼夜を問わず災害対応に当たっている自治体職員の皆様には、心から敬意を表します。

常総市も、2015年9月の関東・東北豪雨災害により大きな被害を受けました。復旧・復興に当たっては、自治労連を始めとする、全国の仲間からの大きなご支援があったからこそ、今の私たちがあると思っています。支援いただいた全ての皆さんへの感謝を忘れず、今後も可能な限りの恩返しを続けていこうと思っています。

これからも仲間を信じて、そして、ともにがんばりましょう。